

花と人間生活



—花は人間にとって生涯の伴侶—

人間生活のあるところ花があります。部屋の中の花一輪が私達の心に無限の安らぎを与えてくれます。

ここでは熊本の花の歴史、現況、産業としての位置づけなど明らかにしながら、花と人間の心のふれあいを、花の頭取さん、栽培業者ならびに美しい熊本づくり運動の展開の中に見ていきます。

熊本の花の歴史

花には木の花、草の花があり、人間生活のかわりから考えると自然の花と園芸の花に分けられます。こゝでは園芸の花を中心に述べることにいたします。

熊本には「肥後銘花」といわれる古典園芸があります。今から二百一十年程前、細川藩第八代重賢公の頃、医薬産業の奨励に端を発し各種薬草木の研究から次第に花の改良や観賞の会が生れ、今日の格調高い肥後銘花の一群が生れたといわれています。

肥後の古典園芸

ヒゴシヤクヤク 古典園芸の中で一番早く庭園、花壇に取入れられ、百八十年前中瀬助之進が芍薬観賞法を定めて花壇栽培が今に伝えられています。

ヒゴギク 京都のサガギク、伊勢のイセギクと共にわが国の古典園芸として広く知られ、百五十六年前、秀島七右衛門により養菊指南書が著されて紅、白、黄菊を

配る花壇行儀作りが伝えられています。

ヒゴツバキ 一重梅志咲の椿が栽培された事が文政年間(百四十五年前)に記録されています。明治の後半には木庄町谷口栄らによって国内にその名が広められ、終戦後も逸早く生産が復興し現在では年産三十万本を数える産業に成長しています。

ヒゴハナシヨウブ 細川藩十二代齊護公の頃(百四十二年)吉田潤之助、山崎久之允らが江戸花菖蒲から改良したもので、六英咲の美花が保存されています。

ヒゴアサガオ 幕末から明治初年にかけて栽培が始まり、明治三十九年朝顔培養法が生れ、洲浜性色彩花の原形が今日もそのままに伝えられています。

ヒゴザンカ 明治十二年山崎貞嗣が作り出した大輪一重梅志咲のザンカの一群であります。

以上、六花の育種改良の基本となってきたものは(1)一重咲で芯が美しい(2)花形が整っている(3)花色の純度が高いことの三点で、それぞれの花によって鉢づくり、花壇づくり、観賞法等が守られています。この外、六花と共に栽培されてき

たものにマツ、ウメ、サクラ、カエデ、フジ等の木本とサクラソウ、ラン、オモ

ト等の草花園芸も栄えて今日に伝えられているものもあります。

花づくりで連帯の輪を!

花へのアプローチ

暗い夜空に、私共は輝やく星を仰ぎ、また生活の間に間に、自然の野や山に咲く花を見る時、いい知れぬ無限の安らぎと希望を感じるものです。花を嫌いと言う人は恐らくいないでしょう。花は人間にとって生涯の伴侶であるといっても過言ではありません。

しかしながらわが国では余りにも恵まれた自然環境に馴れ、四季の景観が手近に眺められる安易さのためか、現代生活にまだまだ花が十分に生かされていない、花へアプローチする努力が足りないという感じがします。

まづ、花を理解することから始めましょう。手始めとして一冊の花の案内書を求めます。美しい多くの写真によって花



△ヒゴシヤクヤク

の性状、育て方を学び、自分の嗜好にマッチした木や草花を選ぶことです。育て方を知らなければ花の心を理解することはできません。現在の生活環境は有り余る程のスペースを許していませんが、例え小面積の庭でも、ベランダでも、窓辺の鉢棚でも自分の好みによった花との触れ合いが四季を通して保てるように一年間の花ごよみを工夫いたしましょう。花を咲かせ、実を結ばせる花づくりの周年は、子供を育てるのによく似ていると言われます。

花づくりは自らの心を養う修養の場ともいわれます。一輪の花が台所にさわやかさを与え、一壇の生花は家庭の和楽に役立つことでしょうか。花が私共に何を語りかけているのか、花の気持が分るようになればいいのです。

庭の花から生垣に、生垣でも花や実または紅葉まで楽しむこともできます。

戸毎の生垣が美しくなれば次は道路、公園、学校、お宮、お寺、引いては村や町全体が四季変わるがわるの花に埋められ、郷土の美化となり、相互の連帯は美しい住みよい生活環境の実現に結びついでくることでしょう。

人間生活のあるところには必ず花が

あり、同時に自然の森にも生活の場にも郷土の花が咲き競うようになることが理想です。都座を離れて太古そのままの自然に接する時、私共は無限の安堵を覚え、明日への活力を養うものです。

汗を流し手を尽し

阿蘇郡久木野村久石
花の頭取 江藤 セキ

「花の銀行」、優しく、そして、暖かい、そのイメージ。綺麗な色文字の可愛い標札とバッジを私が頂いたのは去年の春のこと、あれから九一年になる。

先日、新聞記事の億万長者の番付は、物珍らしさも手伝って、一応、目は通したものの、私達庶民には、およそ縁遠い話と羨む気持ちも起らばこそ、「私は、花の銀行頭取なのよ」と、胸を張って、深呼吸一つ、花の信託、払い出し一切の権限を与えられている幸を誇りにさえ感じたのであった。

去年、春蒔種子を初めて頂いた私達頭取十名は、その種子を各地域の幹部と分け合って、それぞれ家庭で苗作りをした。何しろ菜園でやるのは始めての事でサルビヤが発芽しない人があったり、折角、移植した苗が洪水で流されたりして、がっかりしたこともあったが、とにかく皆で汗を流し、手を尽して、秋には

花との語らい

村内の道路や公民館、生活改善センター等の広場にコスモス、マリーゴールド、サルビヤ等の花が咲き乱れ、集會に集る地域の人々の目を惹き寄せ、又、「種子が出来たらぜひ、おすそ分けを」と所望されたり、暖かい触れ合いが数多く醸し出された。

十月十一日県の方の訪問を受け、これからの花作りに対し懇切に御指導と示唆を頂き感謝した。

しかし、寒冷の阿蘇地方では、秋蒔種子の育苗と管理は至難の業と信じこみ、これまで、宿根草のみを頼りにしてきた平凡な頭取一同が、秋蒔の育苗に意欲を燃やし得なかつたことを申し訳なく思っている。

五月八日、気温十五度、百日草とマリーゴールドを播種。この秋には公民館前広場と二つの保育園を見事な花壇で飾ることを夢みつゝ、無事の発芽を祈りながら、私は如露の水を空箱の苗床にふり注ぐ。



△ヒゴギク